

目次

プロローグ——ある林家の営みから

- 林業地・智頭^{ちづつ}で15代続く赤堀家 8 / 千代爺から受け継いだ山への思い 9 / 毎年こつこつ、木を植え、道をつけ 10 / 少しずつ間引いて大木の山に 12 / 伐り匂を守り、スギは葉枯らし乾燥 14 / 高値を狙える春と秋の記念市 14 / 山仕事はいつも夫婦で 16 / 伐倒より手間がかかる枝払い 18 / 造材は商品をつくる大事な作業 19 / 林道があれば一本ずつお金にできる 21 / 専門林家を直撃する木材価格の下落 23 / 伐採量を増やさざるを得ない現実 25 / 現場に足を運び、造林一本の人生 27 / 豊かな山の暮らしを守りたくて 28

第1章 木の価値を高めて林業を元気にする

1 林業は「ソート」を担えるか

- 人と森が疎遠になった「森林国」 32 / 利用可能な森林資源は増えている 33 / データだけに頼らない資源管理を 35 / 「安い木」ばかりが求められている 36 / 集材材の原木からの歩留まりは30% 39 / 軽視される林業段階での価値創出 40 / 木を大切に育て続ける林業こそ 42

2 良質材のマーケットを拡大する

- 無節の優良材だけが良質材なのか 44 / リフォーム需要で良質な丸太に引き合い 45 / 動き出

3 「品質の安定供給」を目指す

- した製材メーカー 47 / 合板や集成材も良質な原料が必要 48 / 良質材の有利販売は中小工場も潤す 49 / 見えるところに木材を使う意義 51
- 木材生産が林家のビジネスにならない 52 / 自伐化だけでは問題は解決しない 54 / 引き算だけでなく足し算、掛け算を 56

第2章 価値の高い木を育てる

1 答えは山にある

- 林業の正解は現場ごとに違う 60 / 一律なやり方で技術力が低下 61 / 無条件の列状間伐の問題点 61 / 間伐や枝打ちは「育林」作業 63

2 究極のソート——吉野の形付け

木の寿命まで育てる ●岡橋清元さん（山主・奈良県吉野町）

- 500年間、木を選び続けてきた 65 / 吉野の「通い道」 66 / 30年生でようやく3000本 / ha 68 / 山守の最高位「**鉦取り**」^{たてど} 69 / **コシム** 吉野の山守制度 72 / 春に形を付けて土用に伐る 73 / まんべんなく、少しずつ抜く 74 / 「落ち木付け」はアホでもできる 77 / どんな木も山側に倒す 78 / 250年、9900本を形付けした山 79
- 垢抜けた山をつくる ●小久保昌巳さん（山守・奈良県川上村） 81

一瞬の選木で経済性と山づくりを折衷 81 / 木の配列は千鳥の目 83 / 垢抜けた山 85 / 山主と山守の信頼関係が原点 87

育林は生活そのもの ●民辻善博さん(山守・奈良県川上村) 89

山守の本身は育林 89 / 他人の流儀も字びの対象 90 / 選木眼がないと山をつくれぬ / 木を選べるのは普通のこと 94

3 撫育一筋30余年 ●譲尾一志さん(兵庫県豊岡市)

技を究める 96

1年間の武者修業 96 / 枝打ち名人の情報は製材所にある 97

200本の鉋を使い分けて枝打ち 98

枝の太さ・堅さ・樹種で使い分ける 98 / 傷つけられたことを木にわからせる 100 / 背と腹を

念入りに打つ 102 / 8月末までに打てば巻き込みが早い 104

育林の基本は植栽 106

園芸ポールとゼロテープで苗木を固定 106 / 傾けて植えたスギ苗を支柱で起こす 109 / 動けな

い木の気持ちになりきる 111

4 挑戦し続ける林業経営 ●速水林業(三重県紀北町)

「速水の木」をつくる 112

広葉樹を残すのもヒノキを育てるため 112 / 市売問屋を介した直送で流通合理化 115 / 「速水

の木」をひとりで作材する男 116 / 木に惚れすぎるな 118

「速水の木」の育て方 120

コストを下げてても品質は下げない 120 / 疎植、ポット苗、さまざまな合理化実験 121 / ひとつの工夫で複合的な効果 122 / 作業効率はずべて数字で表わす 124 / 試行錯誤は終わらない 126

▶ **コラム** 植栽効率を動画で分析 127

5 「良い山づくり」が良い人材を集める 129

「B材でいい」「では面白くない 129 / 質の高い木を育てる技術が刺激になる 130

6 丸太は商品——ポイントとは造材 131

規格に合った丸太をつくる 131 / 寸足らずでも柱がつくれる 132 / 2 cm 括約を意識した寸法管理を

第3章 木を育て続ける——「自伐林家」という生き方

1 「自伐は儲かる」のか? 136

自伐林家のイニシアチブを確保する 136 / 父祖の思いに報いる 137 / 生産するだけでは林業は成立しない 138 / 木を育て続けることこそが林業 139

2 自伐林家の営み 141

林業で食べ続けるための技術と経営 ●菊池俊一郎さん（愛媛県西予市） 141

枝打ちに没頭する2カ月間は無収入 141 / 人件費と利益は別 143 / 挿し木苗を混植して多様性を確保 144 / 省力林業を目指して独自品種を選抜 146 / 選木の流儀は「木を多めに残す」こと

1

製材品はなぜ売れないのか

- 加工・流通業界の役割が重要 180
- 良質材の価格は大幅に下落 181
- 建築工法の変化が原因 182
- プレカット加工とローコスト住宅 183

180

第4章

木の価値を高める木材マーケティング

- 147 / 造材は1本の木で2回やる 147
- 補助金なしに林業で食べ続ける 148
- 雪に強い優良大径材を次代に託す ●八杉健治さん (福井県福井市) 149
- 集落ぐるみで間伐材を生産 149
- 早く太らせ、雪に強い木に 150
- 間伐と枝打ちで成長をコントロール 152
- 「適期」の作業がよい山をつくる 154
- 次の世代に託す思い出の山 155
- 木材と花卉の複合経営で活路を開く ●大江俊平さん・英樹さん (和歌山県田辺市) 156
- 龍神でも有数の專業林業家 156
- コウヤマキの生産性はトップクラス 157
- プレミアムなサカキを商品化 159
- 雷の日以外は山に行く 160
- 生後半年から息子を山へ 161
- 父祖から受け継いだ山を守る ●奥山総一郎さん (岡山県真庭市) 162
- 週末は山仕事 162
- 職場での挫折が山に向き合う契機に 163
- 山の収入は山のためだけに使う 165
- 自分の代で山を台無しにできない 167
- 祖父が歌集と祠に込めた思い 168
- 確かな技術を身に付ける 171
- 「ひとり六次産業化」を目指す 172
- 「晩生の木」を育て続ける ●栗屋克範さん (熊本県山都町) 173
- 秘境中の秘境 173
- 年輪を重ねる音が聞こえる 174
- 高樹齢品種を主役に300年生の山へ 175
- 好かんことは好かん 176

2 ユーザーアクセスのあり方を考える 185

大きくて良質な間伐材もある 185 / そろそろ「間伐材」から卒業したい 186

3 木材のスタンダードを機能させる 187

「好みの木材」を探し出すのが難しい 187 / 品質の指標があいまいでわかりづらい 188 / 木を使いやすくしてユーザーを拡大する 189 / 独自の統一規格で「選ばれる」製材品に 190 /

【コラム】製材JASの課題 191 / 材木屋を頼りにする 192

4 良質な無垢材利用へのインセンティブを高める 194

補助の条件は木を現わして使うこと 194 / 良質な建物を適切に評価する 195

5 木材業界の人材を育成する 197

林業は年間3300人が新規に就業 197 / 就業促進・キャリアアップの仕組みがない 198 / 賃金より大事な「明るい展望」 200 / 「人づくり」こそが業界の発展につながる 201 / 大工は今でも

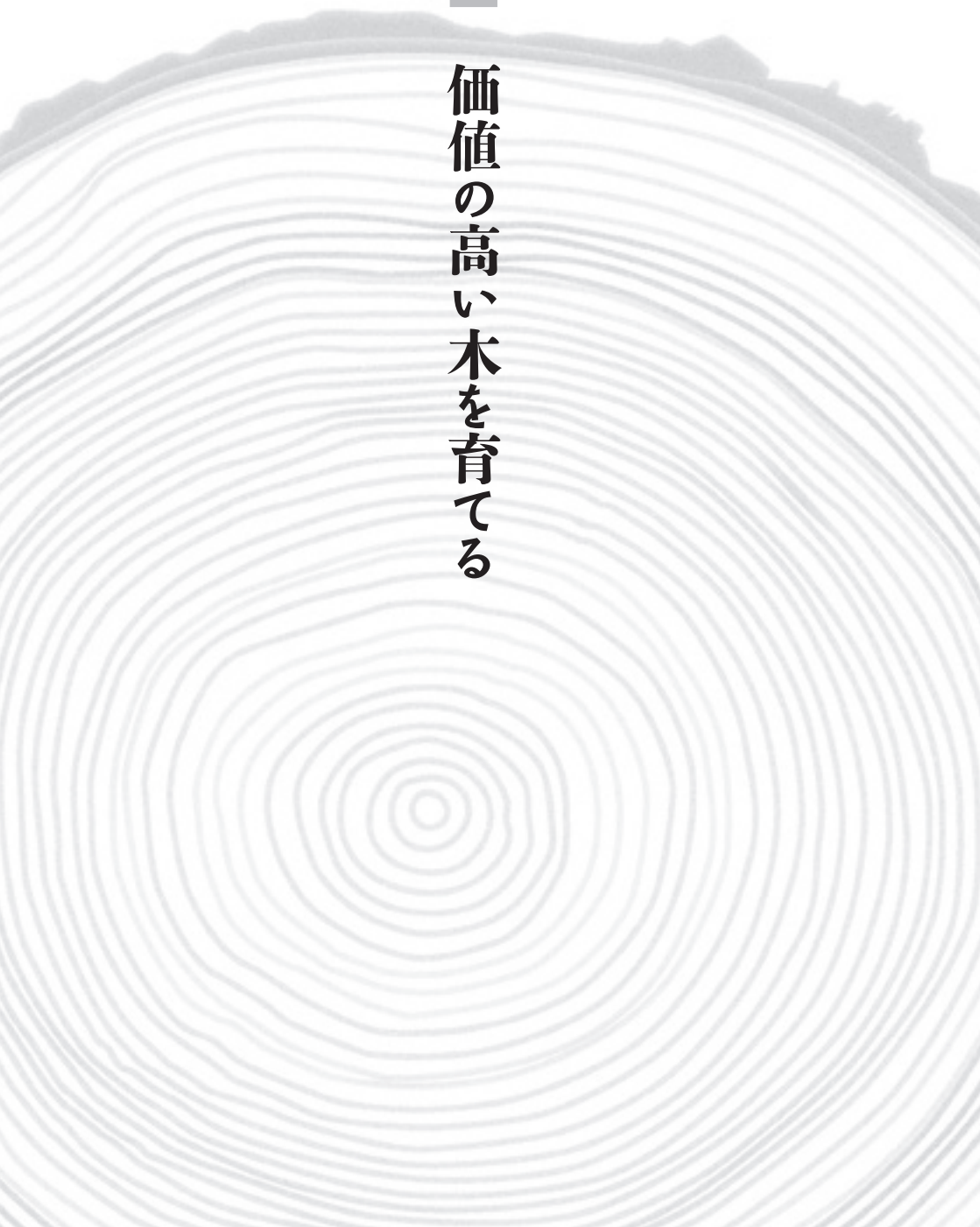
憧れの職業 202 / 家づくりに大工の技を生かす 203 / 「木を知る」建築技術者の育成も重要 204

エピソード——じいちゃんの山仕事 207

あとがき..... 212

第 2 章

価値の高い木を育てる



1 答えは山にある



林業の正解は現場ごとに違う

平成26年に封切られた映画「WOOD JOB!〜神去なあな日常〜」のプロデューサー、深津智男さん（ジャンゴフィルム）は、林業の実態を知るために、自らの立場を隠して「緑の雇用」事業の研修に参加するなど、体を張って映画化に向けた取材を行なった。そして実際の作業を体験し、さらに各地の林業関係者から話を聞く中で、出会った人ごとに話の内容が当たり前のように食い違うことに、たじろぐような思いを抱いたという。

「同じ林業地でもね、山ひとつ違うだけで言うことが違うんですよ。なるほど、そうなのかとわかったつもりになってても、次に会った人から全然違うことを聞かされる。これはもう、そういうものなんだって思うしかないじゃないですか。『林業って御しがないな』って思いましたね」

そんな深津さんの話を、ある講演会で聞いた私は、あの映画が林業の現場や山村の暮らしをコミカルに描きつつ、ある種のリアリティが全編を貫いているように感じられたわけがわかったような気がした。そう、林業は現場ごとに違うのである。それぞれの現場に正解があり、ここで行なわれているやり方は、ほかの現場で通用するとは限らない。深津さんは、そのことに敬意を払って映画製作に当たってくれたのだと思う。

だが、残念ながら、現在の林業現場には、深津さんをたじろがせたような現場ごとのこだわりが薄れかけている現実がある。

一律なやり方で技術力が低下

言うまでもなく、森は気候や地形・土壌といった自然条件が地域・場所によって異なる。さらに、樹種はさまざまであり、品種や個体による違いもある。年ごとに気候も異なる。そのように多様な条件が複雑に交錯する中で、質の高い森をつくっていくためには、それらの条件をよく把握し、適切なときに適切な作業を行なって、木を育てなければならぬ。つまり、そのときにその場では何が適切なかの判断力を磨く必要がある。相手は自然であり、同じやり方を一律に適用するだけでは通用しないからだ。そして、そういった判断の積み重ねが、地域ごとに異なる技術の発達につながり、現場ごとに最善の手法を見出す能力を培ってきた。

ところが、昨今の林業界では、補助金の交付要件など、決まった条件に基づいた作業を行なうだけで事足りるかにように受け止める向きがあり、それで果たして良いのかと私は疑問を覚えることがしばしばある。

たとえば、間伐をどのように行なうかというのも、林地の条件や木々の状態、あるいは、そのときのマーケット動向などの条件によって、さまざまな判断がなされるべきなのに、間伐率について「本数で30%」という規定があれば、その通りにやるだけで満足してしまう。搬出量を増やすほど補助金がよりたくさんもらえるとなれば、それに合わせた作業を段取りし、規定に合った本数・材積を確保することばかりを考える。そのような規則や取り決めに従うだけでは、本当の意味での技術力が低下する一方ではないかと心配になる。

無条件の列状間伐の問題点

現状では、多くの人工林が手入れ不足状態になっていることを受け、少しでも早く状態を改善するために、いわば緊急避難的な手法が取られるケースが多くなっている。伐採率が4割、あるいは5割ほどにもなる強度間伐や、機械的に列を抜いていく列状間伐などが、それに当たる。

ただし、それらはあくまでも「緊急」な場合の手法であって、普通の状態の森林に適用される手法とは、はっきり区別されるべきだろう。しかも、手入れ不足林であっても、そうしたやり方が適さないところもある。ところが、それらの手法がコストダウンにつながりやすいことや、生産量を増やすことが求められていることなどから、「手入れ不足」とされれば無条件に適用されたり、一般的な施業方法であるかのように実行されたりするケースが増えている。

たとえば、列状間伐に関しては、最近、国や自治体の補助制度が、この方法で作業することを前提とした内容になっている実態がある。機械的に列で抜くということは、選木の時間がかからないので、コストは当然安くなる（写真2-1）。しかし、残される木も生産される木も、状態の良い木と良質な木とが混じり合う結果となるので、作業後は不ぞろいな印象の山になりがちだ。実際の手法としては、3列を残して1列を伐る3残1伐であったり、2列を残して1列を伐る2残1伐であったりするわけだが、いずれの場合も、片側だけ空間が空いた状態で立つ木が出てきてしまう。空いたほうの枝だけが勢いよく伸びることになれば、重心のバランスが崩れて幹が曲がったり、アテが生じたりと、材質にも悪影響を及ぼす可能性が高まる。

一方、列状間伐には選木の手間がかからず、伐倒する際にも掛かり木が生じにくいというメリットもある。伐り倒した木を運び出すのも、列なりに倒れているわけだから作業がしやすい。ある程度形質がそろった状態の山で作業するなら、それほど不ぞろいな山にはならないとする意見もある。



写真2-1 列状間伐の現場。機械的に列を抜くので選木や伐出の手間が大幅に軽減される。

このあたりの評価については、さまざまな議論があり、実際の山の状態もそれぞれなので、紙上では適否を判じにくい。しかし、だからこそ、無条件に列状間伐を行なうのではなく、林地の状況をよく見て、どんなやり方が適切な判断が下されるべきだろう。それなのに、半ば機械的に列状間伐が適用されるケースが増えているのは、間伐を行なうことや間伐材を生産することだけが目的となっていていからだと思われる。

間伐や枝打ちは「育林」作業

本来、間伐や枝打ちは「育林」のための作業であって、そのやり方いかんによって立木の質は良くも悪くもなる。ところが、最近はそのらの作業の必要性が林内の環境を適切に保つという「森林整備」の面ばかりで強調される傾向がある。それが緊急避難的な作業方法を「整備が必要だから」と一律に適用することにながっている。

確かに、間伐が遅れば木が込み合い、線香のように細くなって、風や雪に弱い森になる危険が増す。ひどい場合には、木が枯死してしまう可能性もある。木が込み合うと、林床に太陽の光が届かなくなり、下草が生えずに土壌がむき出しになる。その状態で雨が降れば、土壌が流出する危険が高まる。そこで間伐が必要になる。込み合った状態を改善すれば、林床に太陽の光が届いて、下草が繁茂して土壌を守る。人工林の環境を健全に保つ上で、間伐が大切な作業であることは間違いない。

だが、そもそも間伐は、安定した品質の木を育てるために重要な意味を持つ。土壌を適切に保つことは、木の成長を維持するために必要であるし、間伐で林内の密度を管理することは、成長の度合いをコントロールすることにつながる。うまくコントロールできれば均質な年輪の木を育てることができるし、これはもともとの植え付け本数（密度）とも関係してくるが、ある程度、密な状態で育てれば、細かい年輪が得られる。太るよりも上に伸びるほうが旺盛になれば、下から上への細りが少ない完満な姿に仕立てることができる。反対に、豪雪地帯などで早く太らせて雪に強い木にしたい場合などは、空間を広めに空けて管理するや

り方もある。

枝打ちは、言うまでもなく、無節、あるいは節の少ない安定した品質の木を育てるための作業である。間伐による密度管理とも密接な関わりがあり、濃い目の密度なら枝が太くなりづらいため枝打ち痕が小さくなり、きれいな材面に仕立てやすくなるし、枝が細ければ作業の負担を軽減することにもつながる。枝葉の量は成長の度合いとも関わるから、適切な作業を行なうことで、年輪幅をコントロールすることもできる。

このように、間伐や枝打ちには、目標とする材質に育てるための育林作業としての意味がある。もちろん、手入れ不足を解消し、森林環境を健全な状態にすることが重要であることは言うまでもない。だが、産業としての戦略を考えるならば、第1章で見たように、やはり安定した品質の木材を生産できるようにすることが必要であり、そのためには「整備」だけでは済まない側面がある。それぞれの作業は、目指す品質を実現するための「育林」行為であることも意識し、効果が期待できる作業を行なうようにするべきなのである（写真2-2）。

その手掛かりとするために、以下では、国内でもっとも古い植林の歴史を有し、最高級の木材として隠れもない吉野杉・吉野檜の産地である奈良県・吉野林業地の育林技術を紹介するほか、枝打ちをはじめとする育林技術に強いこだわりを持つ撫育専門業者の仕事ぶりを見ていく。さらに、新たな林業経営手法のあり方を常に模索し続けている三重県・尾鷲林業地の速水林業の取り組みを紹介する。



写真 2-2 間伐と枝打ちが綿密に施された林分。緻密で均等な年輪の木になる。

2

究極のソート

吉野の形付け



木の寿命まで育てる

●岡橋清元きよもとさん（山主・奈良県吉野町）

500年間、木を選び続けてきた

吉野は間違いなく、日本で一番たくさんの木を選んできた林業地である。それは、植林が始まったのが500年前の室町時代とされ、日本でもっとも古い林業地であるということが理由のひとつ。間伐する木と残す木を選んできた歴史の長さや経験の豊富さにおいて、吉野の右に出る林業地はない。

もうひとつの理由は、山の仕立て方が1haに1万本から1万2000本もの苗木を植え付ける密植方式を採用していることである。通常の植え付け本数は3000本/haとするのが一般的で、ちょうど畳2枚分の広さ（1坪）に1本を植える勘定になるので「坪植え」と呼ばれる。吉野の植え付け本数は、その4倍ほどにもなる。

しかも、多くの林業地が短ければ40〜50年、長くても80年か100年程度ですべての木を伐採し、跡地に植林するというサイクルで山林経営を行なってきたのに対し、吉野のサイクルは100年を優に超え、200〜250年、あるいはそれ以上もの時間をかけて木を育て続ける。つまり、ひとつの林地で、たくさん木を長期間にわたって選り続けるのが吉野林業なのである。

では、具体的に吉野では、どのような山の仕立てが行なわれてきたのか。本節では、吉野における五大林